

「2024年度ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 石河 圭太

① 学習成果

今回のベトナム派遣プログラムに参加したことで、私の留学や国際理解への意欲は大きく高まった。参加前は漠然と海外に興味があるだけだったが、実際に現地で過ごし、さまざまな経験をしたことで、海外留学を視野に入れるようになった。特に、同プログラム参加者から受けた刺激は計り知れない。興味関心が幅広く行動力の高い人たちがばかりで、二週間行動を共にして本当に勉強になった。留学について話していたメンバーも、帰国後すぐに行動に移っていて、自分も同じ勢いで行動しようという気にさせられた。尊敬できる同世代の仲間と出会えたことは、このプログラムで得た大切なものであると思う。

② 海外での経験

ベトナムでの体験は、自分が今まで暮らしてきた日本や社会を見つめ直す契機となり、主に三つのことについて考えさせられた。

一つ目は、日本での暮らしやすさだ。特にサニタリー関連が清潔で、水道水も飲むことができる。また、自分が日本で育ったということもあるかもしれないが、ベトナムでの食事は一品のおかずと取り放題の野菜という構成が多く、健康的ではあったがどこか物足りなさを感じた。それは、一汁三菜という構成に慣れ親しんでいたからだと思う。食事のバリエーションは、美味しさとは別に心を豊かにすることを痛感した。

二つ目は、日本での働きにくさだ。ベトナムの生活では、店員の方が暇なときにスマートフォンでゲームをしたり、動画を見たりと自由に過ごす姿を目にすることが多々あった。もちろん接客が必要なときには対応しているのだが、アルバイトでずっと同じ姿勢のまま笑顔で立っていることを強いられていた自分からは、衝撃的に映った。もちろん顧客の立場ではベトナムの接客が最善だというわけでもないと思うが、日本にはそうした緩い職場がない、あるいはあっても認知されていないというのは、最初から選択肢がないようで不自由だと感じた。

三つ目に、社会全体について、豊かになったその先はどうなるのか、ということだ。現地の学生との共同発表で、あるグループがベトナムと日本の若者では将来への希望に大きな差があるという内容の発表をしていた。ベトナムは発展途上国で勢いがあるから、自分の行動と社会の成長の結びつきが考えられて希望を持ちやすいが、日本は希望を持つ若者は少ないというものだった。恐らく、日本は生活の基盤がある意味できすぎているが故に成長の余地が少なく、希望を見出すことができないのだと思う。であるとすれば、ベトナムも生活の基盤が整えられれば、いずれ今の日本と同じように若者の希望が失われるのではないかと思い、競争社会の限界について考えさせられた。そして多くの人々が物質的に満たされ、その価値が平準化された先にある価値は何なのかという、発表で日本の強みとして挙げられていた文化、スポーツ、芸能なのではないかと思う。あるいは人との関係性や自己実現が課題になるのかもしれない。自分はまだこれ以上考えを進められていないが、自分が文学部ということもあり、もし文学がその中に含まれているならば、文学研究の意義を一つ自分で見つけられたようで嬉しい。

③ プログラム内容

語学研修ということもあり、自分がベトナム語を学ぶ立場であると同時に、海外の人に日本語を教えるという経験もした。「場所+に」と「場所+へ」の違いについて教えるのに苦戦し、文法を体系化する研究者のすごさを実感した。まるで自分の言語を外国語として捉えたかのような感覚に陥った。また実地研修では、仏教の寺院と伝統的な村を訪れた。実地研修では、ベトナムと日本の共通点を実感することが多かった。当初私は、ベトナムと日本は東南アジアと東アジアで異なる国だという認識で、その違いを体験する機会が多いと予想していた。し

かしそれは生活のレベルの話で、仏教や食、漢越語といった文化のレベルではアジアという広範なつながりを見出すことができた。

④進路への影響

このプログラムを通じて、留学への意欲が一層高まり、より長期的な留学プログラムへの参加を検討し始めている。国際的な環境で学び、研究することで自分の専門性を高めつつ、グローバルな視野を持った人材になりたいと考えている。今は、海外の大学院への進学を検討している。